

白山ふるさと文学賞

第十一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「連れ出して、私のエトワール。」

笠間中学校二年 宮崎 紗妃

午前六時に目が覚めて、ぼやけた視界を擦った。真白な壁、真白な床、真白なカーテン、真白なベッドに真白な病衣。私の生きた十三年間の大部分を占める色。あともう少しで看護師さんが私の肌に針を刺しにくる。先程とさして変わらない視界のまま、窓の外に目をやる。病室からの景色は、頭が痛くなるくらいの眩しいきらめきで満ちていた。

食事をして、読書をして、いつか病気が治って、目の先の薄い硝子の向こうで呼吸する夢を見て、午後十時に眠りにつく。そんないつも通りの日々を終止符を打ったのは、同じ歳の男の子。

「よーつす、紬。また本読んどるんか。」

「あ、久しぶり。これ結構面白いんだよ。読み終わったら貸してあげるね。」

「俺はええかな。そないに分厚い本読み終わる気せーへん。」

「いかにも本好きそうな顔してるのに……。」

「そんな顔してへんわー！」

ノックもせずに病室に足を踏み入れたと思えば、突然大声を出してやってしまったと今更口を抑えて焦る男の子。同年代の男の子より少し長めに切り揃えられた髪に、オーバル型の眼鏡からは切れ長の瞳が覗いている。そんな生真面目そうで端正な容姿と豪快な関西弁のミスマツチな感じが面白い彼。本人曰く、氷高紬斗ひだかあやとという人は、謹厳実直、温厚篤実を人にしたような人らしい。私は知らないけど。

「次の退院っていつ頃なん？」

「八月の終わり頃だと思っ。」

「あ、せや、夏休みは部活ほぼ朝練やし、ほぼ毎日来れるで！」

「……紬斗、友達いないの？」

「おるわ!!」

怒る紬斗を尻目に、読んでいた本に葉を挟む。この本ももう少しで終わってしまうから、早く借りに行かないと。

「なあ、紬。」

「なに？」

「八月二十日、再来週の日曜日に花火大会あんねんて。一緒に行かへん？」

「……本当に友達いないの？」

「おるつて言うてるやる!!もお、優しい紬くんが誘とるんやから、もーちよい素直に受け取つてや。」

「行けないよ。混雑する場所には行かないでつて言われてるし。」

「そう言うつて分かつつたで！」

待つてました、と言わんばかりに紬斗はニヤリと笑う。そして、通学用リュックから透明のファイルを取り出し、私に差し出した。挟まれているのはホッチキスで留められた数枚の紙。一枚目の紙の中心には、大きく『花火鑑賞決行計画書』と書かれ、その周りには、色とりどりの花火と、浴衣を着た二人の男女が描かれている。

「俺の超々貴重な夏休み使つて考えたんやから、これは絶対いけんでーちゃんと紬の病気のことも、ようさん調べたんやし。」

得意満面に計画の説明をする彼の表情、凛とした声。それらに胸の奥がじんわりとあたたかく痺れる感じがした。

「当日、屋台やなくて海の家回るんでええか?そこやつたら、人あんまおらんし花火もよう見えるつて言うててん。従兄弟が。」

「体調、いつ悪くなるか分からないのに、お医者さんもお母さんもお父さんも、許してくれるか分からないよ。」

「……紬は、行きたないん？」

「行きたい、けど。」

「ほな行こうや!折角の夏休みなんやし。来年、俺も紬もここにおるか分からへんのやし。お医者さんも、紬の親も俺が説得したるわ……:まあ、紬も一緒にしてくれたら有難いんやけどな。」

あはは、ときまりが悪そうに笑いながら、紬斗が私の表情を伺う。い

つも変わらない真白な日常に、眩みそうな輝きを与えてくれるこの人の、なおいつそう赫耀とした提案に乗りたいたい。その手を取って、硝子の向こうに行ってみたい、そう思った。

「説得頑張つてね、絢斗。超期待してるから！」

「ちょ、一緒にするねんなあ？あ、せやっ。絢の親っていつお見舞い来るん？」

「毎週土曜日、午前十時くらいかな。」

「ほなそんなときは早めに行くから、心の準備しとつてな！じゃ、ほな。」

「またね。」

絢斗は、蝶みたいにひらひらと手を振って病室を出ていった。本当に、夢みたいな提案に乗ってしまった。そんな自分に驚いてしまう。いつから、叶わないことを願うようになったんだろう。

八月十二日土曜日、午前十時二十二分。

「は、初めまして！俺、絢サンの友達で、氷高絢斗です。」

「初めまして……。」

「あの、今日をお願いしたいことがあって。」

お母さんは表情もなく、じっと絢斗の顔を見つめている。見てるこっちが緊張してきちゃう。

「八月二十日、花火大会に絢を連れて行く許可を貰えませんか！」

初めて、母の表情が変わった。

「……それは、大丈夫なの？お医者さんの許可は？絢の、絢は、行きたいの？」

「私は、行きたいよ。お医者さんにも許可貰った！絢斗には迷惑かけるけど……それでも、行きたい……。」

「俺、絶対、絢に怪我もさせへんし、楽しませる……します！やから。」

「ふふ、じゃあ、大丈夫ね。お父さんには私から言っておくね。じゃあ、仕事戻るね。」

久しぶりに見た。目を細めて、柔らかく微笑む母の顔。絢斗が慌てて頭を下げた。これで障壁は全て無くなった。あとは当日を楽しみにするだけ、そう思っていた。

翌日、体調が急変した。三十八度を超える熱、鼻血が止まらず、真白の病衣にみるみる赤が染みていく。咳が止まらなくて、喉が痛い。目眩がひどく、脳みそがグラグラ揺れて気持ち悪い。指先から徐々に感覚がなくなつて、もう体が自分のものじゃなくなつていく。暗くなる視界で、機械類の無機質な音と、誰かの大きな声だけが鮮明に頭に響いた。

午後四時。薄い霧がかかったような視界を擦る。真白な壁、真白な床、真白なカーテン、真白なベッドに真白な服。数カ月前までの人生の大部分を占めていた色。硝子越しの景色は、相も変わらず頭が痛くなるくらい、眩しいくらめきで満ちている。

「っ絢!!お、起き!?な。」

「え、どうしたの?怖いよ。」

「めっちゃ怖かってんぞホンマに!!せや、ナスコール!」

涙を流しながらこぼれるような笑みを浮かべるその表情が面白くて、笑ってしまう。頬に伝う涙を病衣の袖でぬぐうと、更に涙が溢れてくる。慌てて走ってきた、いつも針を刺しに来る看護師さんも泣いていた。場が落ち着いて、絢斗が帰って、いろいろな検査を終えて、疲れて、眠りについた。検査の途中に聞かされた話では、三日間ずっと寝たきりだったという。どおりで、みんな驚いてた訳だ。多忙な両親もこまめに様子を見て来てくれていたらしい。お母さんは、白藍の浴衣をわざわざ買って贈ってくれたらしい。幸い、ただの風邪が少し悪化しただけ、らしく、花火大会の計画は無くならなかった。

「絢!あつこの海の家行くで!」

「ちよつと、速いよ絢斗!」

「えっ!?あー、スマン!ほら、手。」

「・・・ありがとう！」

差し出された手を強く握る。さつきより狭くなった絢斗の歩幅に笑みがこぼれた。

「絢、食べたいのがある？食べ切れなかったら俺が食べたるし、好きなん好きなだけ買おたらええで！」

「じゃあ・・・かき氷と焼きそばとポテトとたこ焼きとべビーカステラ！あと、りんご飴とお好み焼き！」

「あ、なんやえらいお腹痛なってきたわ・・・」

「冗談だよ。ねえ、花火はどこで見るの？」

「それは着いてからのお楽しみやろ？ほら、はよ買うて行くで。」

両手一杯に食べものを持って、山道を歩くと、広い草原に着いた。絢斗がリュックから大きいレジャーシートとひざかけを取り出して、広げる。

「・・・体調、大丈夫か？辛なったらすぐ言うんやで。」

「絢斗、聞きたいこと、あるんだけど。」

「なんや？」

「なんで、急に花火大会に、私を誘ったの。」

「絢が、ちよっと前に「一回は外で遊んでみたい」って言うてたから。」

絢斗は照れくさそうに鼻をかいて、柔らかく笑う。

「すごい・・・綺麗、だね。」

絢斗が満足そうに笑顔を咲かせる。

「私今、すごく楽しい。すごく、きらきらしてる。ねえ、絢斗。」

咲き続ける数多の花火に、その光を帯びて光るかき氷。何より幸せそうな絢斗と、涙があふれそうなほどに幸せな今。このままで永遠を謳歌したかった。

「これから病気が酷くなつて、歩けなくなつても・・・、もし、病気が治つても、また、計画書書いてくれる？」

「絢が願うんやつたらなんでも叶えたるよ。俺、ちよ～優しいからな！」

「もう、台無しだよ。」

真白な日々に輝きが現れてから、諦めかけていた人生の、この先を願えるようになった。

明日から、病室からの景色は少しでも変化があるのだろうか。花火と、すぐ傍の君に願う。

いつかまた、あなたが硝子の向こうに連れ出してくれることを。

